
サザエさん

ゴキポン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サザエさん

【コード】

N9250H

【作者名】

ゴキポン

【あらすじ】

平和に暮らしている磯野家に様々なトラブルや事件に巻き込まれるストーリー。

第1話「磯野家の地獄の朝？」（前書き）

暇なときに作った小説です。友達に見せたら、大爆笑していました。

第1話「磯野家の地獄の朝？」

ここ日本にどこにでもありげなく一般の一軒屋があった。その家には「磯野」とある。

そうみなさんもお分かりのようにこの家には「磯野」という住人がおったのじゃった。

(じゃった!?) この家に転がり込んでいる住人の紹介をしよう。

「フグ田サザエ」磯野家の長女。アニメのタイトルもここから出てきた(ここは説明する必要ないか(笑))。

「磯野カツオ」磯野家の長男でサザエの弟でカツオはサザエのことを姉さんと呼んでいる。

みなさんも知つてのとおりコイツが磯野家の厄介者でいつも他人に迷惑をかけるばかり小学生である(少し言い過ぎた・・・)。

「磯野ワカメ」磯野家の長女でカツオの妹。なぜかいつもパンツ丸見えなちよつとエロイ(?)小学生。これは作者の気まぐれか趣味かそれとも「サザエさん」を見ている人にサービスしているのか不明。

「磯野波ヘイ」磯野家の大黒柱で3姉弟の父。職業はセールス・じゃなくサラリーマンで趣味は盆栽(BONSAI)。この男の怒りはドラえもんに出てくる雷おじさんと同レベル。

「磯野フネ」波ヘイの妻。アニメなどはあんまり怒るシーンは全くないのだが、実はあるのであった。年齢・趣味・特技不明。

「フグ田マスオ」サザエさんと結婚したサラリーマン。どうしてあんな女と結婚したのか自分でも分からない。マスオ兄さんはとっても優しい人物である。(こんな兄さんほしいな)

「フグ田タラオ」サザエとマスオの長男。あだ名は「タラちゃん」。この人物は y u t b e や 二 動画にある「タラちゃんがデスノートを持ったそうです」でタラちゃんがデスノートを使って自分の家族を1度殺した者である。その動画はとても人気が高く評

価があった。動画に出てくるタラちゃんの名言「殺るD E A S E」。
(こえー！！！)

以上磯野家の紹介を終わる。

ある日、磯野家はいつもどおり生活を過ごしていた。

サゼエ「カツオ！いつまで寝ているの？早く起きなさい！！」
つとカツオに言ったら、

カツオ「うっせえなこっちはねみーんだよ」

カツオは眠たそうに言った。

サゼエ「ワカメはもう起きて出かけたわよ」

カツオ「何！？あのパンツ野郎あれだけ起こせと言ったのに」

サゼエ「何回も起こしていたわよ、でもね……」

とサゼエはワカメのことを話した。

数分前……

ワカメ「お兄ちゃん起きて、朝だよ」

カツオ「zzzzzzzzzz」

ワカメ「……。仕方ない、奥の手を使うしかないわね」

とワカメは自分の机の引出しからワカメのストレスを解消するため

の武器「ワカメ・ハンマー」を取り出した。

すると、

ワカメ「でりゃー！！起きやがれくそ兄がー！！！！」

と大声で叫びながらカツオに向かって叩き始めたのだった。B U T、
しかし

カツオは叩かれてもびくともしなかった。

ワカメ「Shi^{くそ}t! 10tだぞこのハンマー」

カツオ「zzzzzz」

ワカメ「そう・・そうですか。じゃあずうつと寝とけばいいわ地獄

を見ることになるはbro^ろther（お兄ちゃん）だからね。オー

ホホホ！！」

その時、サゼエがもしものときのために二人の様子を監視するために居間に穴を開けた覗き穴「I M A」からワカメとカツオの様子を覗いていたのだった。

そしてワカメはその子供じみた仕掛けにも気づかず居間を開けてサザエは驚いた。

ワカメ「どうしたのお姉ちゃん？顔色悪いわよ」

サザエ「えっ！あっああワカメにはそう見えるの？最近がんばり過ぎて疲れたのかな。アハハハハハ」

つとサザエは笑ってうまくごまかしたのだった。そうアニメ・漫画ではサザエさんは仕事をしていないごく一般の主婦だった。

だが、今は仕事先が見つかって立派な社会人の一人となっているのだ。

サザエ「いつ・・・いつてらっしやいませだわ」

・・・意味が分からん。

ワカメ「お姉ちゃん、病気なんかに負けないでね」

と萌えキャラみたなボイスで言った後、家から出た。（ワカメキモ

ーイー！！）

その話を聞いたカツオは

カツオ「なるほど、おれが寝ている間にそんなことがあったのか全然気づかなかったＹＯ。ケツ！なーにが病気なんかに負けないでね　っだ！いいこぶるなんざ１００年はえつつうの！！見ている倍返しにしてやるゲへへへへ」

カツオはこの世のものとは思えない笑い声をした。非常にわるだくみをしそうな顔をしている、この顔は写真で取ってオークションに売りつけてやるうとカツオの顔芸を見て心の中で奇妙な笑いをした。サザエ「そっういえば、ワカメにあれだけいたぶられているのになんでアンタそんなにぴんぴんしているの？」

サザエはカツオに質問をした。

カツオ「あーあの時・・・」

つと突然カツオは自分が着ているパジャマをサザエの前で脱ぎ始めた。かおりちゃんの前で自分のたくましい体を見せる練習をするのかとサザエは思った。ただそうではなかった。

カツオが着ていたパジャマの下に防弾チョッキらしきものを身にま

とっているではないか。

カツオ「このスーツはどんな武器だろうと核弾頭だろうと耐えられるスーツ「KATUO・SU-TU010」を装備していたのさ」
サザエ「ふ〜んよく分かんないけどそうしている間にもう遅刻するわよ」

AM(午前) 8:25分

カツオが今通っている学校は8:30から授業が始まるのだ。

カツオ「うわっマジかYO!やべーYO!」

カツオはいちいち最後にYOというのはとても腹が立ってとても迷惑がかかりそうな言葉である。するとカツオはこの状況で遅刻せずにすむ方法を思いついた。

カツオ「ねえねえ姉さん、自転車あるよね。その自転車を使ってさあ、フルスピードで俺を学校までおくってくれないか」

サザエ「バカー!何を考えているのよこのばか弟が!テレビの見すぎ!」

とカツオの頭にげんこつを3発お見舞いした。ちなみに今カツオは装備している無敵スーツ「KATUO・SU-TU010」は体中をスーツでまもっていても頭はまもっていないという無敵スーツの最大の弱点を彼女^{サザエ}は知っていた。

カツオ「いつてえ!(泣)なぜ・なぜおれの無敵スーツ「KATUO・SU-TU010」の最大の弱点を知っているのだよ(泣x2)」

サザエ「あーそれはねあんた達の部屋を掃除していたら大量のテスト(カツオの)の中に紛れ込んでいたのYO」

カツオ「ガン・・・」

「「うえ〜ん!このスーツを作るのにすごく高かったんだぞ!(金額は秘密)」

と号泣の涙を出しながらカツオは登校した。気の毒に・・・っていうか自分でスーツ作ったのなら弱点なくせばよかつたんじゃない?

こうしてカツオは1時間も遅刻して先生に説教されたのだった。ち

なみにカツオが言っていたことはアニメ「クレ
ある場面を見て思いついたことである。
第1話〜完〜

ちゃん「の

第1話「磯野家の地獄の朝？」（後書き）

みなさんご覧になり誠にありがとうございます。

この小説も連載します。

見ていただいた人はご意見・ご感想をお願いします。

第2話「テスト事件（前編）」（前書き）

ワカメに起こしてと頼んだのに起こしてもらえず、結局カツオは先生に叱られる。

第2話「テスト事件（前編）」

1時間遅れしてして来たカツオは先生の説教が終わった後、自分の教室に入った。

その教室にはカツオのクラスメートがいた。（それは当たり前だ。）
ついでだからカツオのクラスメートの紹介をしよう。

「中島」カツオのクラスメートの一人。カツオの親友で良き理解者。時にはけんかして、時には仲直りをするカツオにとってはとても重要な人物である。

「かおりちゃん」のクラスメート。カツオはかおりちゃんのが好きらしい。いつかかおりちゃんにプロポーズして幸せに暮らすと夢を見ている。カツオのクラスのアイドルの？存在である。

「花沢さん」実は彼女はカツオのことが好き！？不動産屋で働いている父の娘。

（自分は花沢さんのタイプではありません。）

カツオ（うわーもうなんかこの状況スゲー気まずいぞ・・・。（汗）
しかもかおりちゃんもいるしもうお嫁に行けない。）

おまえは女かっていうかオカマか!!!

中島「どうしたんだい磯野？あつ分かった。おまえ寝坊だな？」

カツオ「ありがとう中島。分かってもらえるのは君しかないよ。
ちなみに仮病でもわざとでもないからな！」

中島「おいおい、誰が仮病だのサボリだつて言ったのだよ」

カツオ「ま・まあ分かってくれればいいんだ、後は気にしないさ」

中島「そうそう磯野来たばかりで悪いんだけど、今日算数のテストがあるよ。」

カツオ「What（何）！？なんだって！い・いつだそのテスト！？」

中島「今からだけど」
と普通に答えた。

カツオ「そうだったチクショー！！今回の算数は楽勝と思って寝たのがまずかった！ハッ！まさかワカメが地獄を見ることになるというのはこのことだったのか！！うわー！！！！！！ワカメ！許して！わが妹ワカメ様よ許してくれ！！」

中島達はカツオの発言に疑問を感じながらクスクスと少し笑った。

カツオ「そ・そうだ勉強だっ！今からテスト勉強すれば遅くは・・・

・

先生「えーそれでは昨日言ったとおり算数のテストを始めるぞー」

カツオ「って言っているそばからもう始まってるし！！いつの間に

先生いるんだよ！！っ！かどんだけ先生影くらいんだよクソが！

！！！！

先生「コラッ磯野！机の上にあるのはなんだ！さっさとしまいなさい！！」

カツオ「はい・・・」

こうして算数のテストが始まった。テストが始まってから数分後・・・

カツオ「（あゝもうなんだよこの問題全然分かんないYO。確か簡単な問題だったはずなのにどうしてだ）」

算数のテスト - TESTUO -

年 組名前

点

(1) 8×10 (2) $100 \times 10 \div 2$ 分の 一 (3) 0

$\div 0$ (4) $0 \cdot 001 + 0 \cdot 1$

(5) ある学校に先生が一人いました。そしてその学校に磯野が10人いました。先生の数をかけたらその学校には何人いたのでしょうか？

(6) $1 + 5$ (7) 私が初恋したのはいつだ？

カツオ「(だいたいなんだこの最後の問題・・・てめえの初恋の日なんざ知るわけねーだろーが！)」

キーンコーンカーンコーン

学校のチャイムが鳴りテストは終了した。クラス全員の解答用紙を先生に渡した後いつでもどおりカツオ達はテストの出来具合をお互い聞き始めた。

男子A「なあなあ、テストどうだった？」

男子B「全然。なんなのあの最後の問題おれが買ったクソゲーなみにわからんかった」

カツオ「どうだった？」

中島「いや、どうにもこうにもないさ、特に最後の問題が分からないんだよ」

先生「いきなりですまないが次のテストを始める」

全員「はー!?」

先生「文句を言わないほらっさっさとやる」

次のテストは国語だった、しかも今回の国語のテストは漢字。

カツオ「へへん漢字なんて俺の得意分野のひとつだぜ」

国語のテスト(漢字編)

—年—組名前—

—点

(1) 鰹 (2) 若芽 (3) 鱈子 (4) 蟹 (5)

薫 (6) WHOを別名なんというか漢字で答えよ。

(7) 河津尾 (8) 鮫 (9) 掃除機 (10) 千尋

カツオ「(うそー!!)!!こんな習ってないぞ!!)」

こうして次々とテストがやって来た。それからもう昼食を食べられずそのままテストを続けていたのでみんなはくたくただった。

↓学校の放課後↓

カツオ「やっとオワタ。だいたいうちの学校はテストが多すぎるんだよ!」

中島「全くだよな磯野」

と二人で一緒に帰りながら文句を言っていた。とちゅうの道で帰りは別れて、自分んちの扉を開けた。

ガラガラ

カツオ「ただいま!!」

「おかえりなさい」と玄関にいたのはワカメとタラちゃんだった。

そのときカツオはもう顔がヤバイくらいイライラしていた。するとタラちゃんが心配そうに声をかけた。

タラちゃん「カツオお兄ちゃん大丈夫ですか？」

カツオ「ああ、なんでもないよありがとう」

タラちゃんの言葉でカツオはいやされそうになったあと今度はワカメがカツオに声をかけ始めた。

ワカメ「お兄ちゃん、・・・」

タラちゃんに続き、今度はワカメに声をかけられ「まさかおまえもおれのことを心配してくれるのか」そう期待して後ろを振り向いたら・・・

ワカメ「かおりちゃんにふられたの？ドンマイお兄ちゃん！明日があるさキヤハハハハハハハハハハハ！！！！！！」

その言葉を聞いたカツオは怒り出した。

カツオ「貴様　！！おれがどれだけ苦しい思いで帰ってきたのか分かってんのか！！」

そしてここ玄関でのカツオVSワカメの口げんかが始まった。

カツオ「そういえば今朝おれが寝ている間にハンマーで問答無用で叩きまくったそうじゃないか」

ワカメ「えゝそうよ、お兄ちゃんのことだからハンマーで叩いてもどうってことないのかなーって実験したんだけど」

カツオ「じ・実験だと！？兄貴をなんだと思ってるんだパンツ怪物「パンツ女」！」

ワカメ「そうそう言い忘れたけどお兄ちゃんの頭の中にある算数の記憶を消しておいたわ」

カツオ「なんだって！？それであるとき問題が解けなかったのか！（最後の問題は除いて）」

ワカメ「最近見につけた超能力「記憶抹消」よ。どう地獄を見た感

想は？」

カツオ「へっ。そんな超能力大した事ねーぜ。俺は今日それよりもっと地獄を見たぜ」

ワカメ「へへ。私が見せる地獄よりさらに怖いものがあるっていうの？ああん！？」

カツオ「あーあるぜ！それはな・・・」

タラちゃん「ぼくも超能力を持ってるです。」

と二人の口げんかの間にタラちゃんが入り込んだ。

「？」

二人はタラちゃんの言葉を聞いてカツオはタラちゃんに聞いた。

カツオ「どんな超能力を持ってるんだいタラちゃん」

するとタラちゃんはある物を出し始めた。ノートだった。そのノートには「ですのーと」と書かれていた。

タラちゃん「これからぼくの超能力をみせるD E A S E」

とそう言ってタラちゃんはノートを開きなにかを書き始めた。ページには「かつおおにいちゃん わかめおねいちゃん」と書いた。

その書いてあったページを見た二人は

カツオ「なんだよこれのどこが超能力だよ」

ワカメ「そうよ冗談は顔だけにしてよ」

と二人はからかうようにタラちゃんに言ったその時！二人に異変が起きた。

「うっ！！」と二人は言って二人は死んだ。タラちゃんの言ったことは冗談ではなかった。しばらくたつとタラちゃんは二人に呪文のようなものを唱え二人は生き返った。タラちゃんは二人のけんかを止めるためにノートを使って二人を一度あの世に送ったのだ。タラちゃんは「二人とも頭を冷やせ」そう伝えたかったのだろうか。二人は生き返った後、反省して仲直りになったのだった。めでたしめでたし。つとここで話はまだ終わらない。

なぜなら第2章のお話は「テスト事件」の前編だからだ。このお話の舞台はここからだ。

次の日

中島「今日はテストが帰ってくるぜなあ、磯野」

カツオ「え、もう帰ってくるのか？」

中島「おっ来たぞ」

先生「さあ、みんなもたぶん知っていると思うけど昨日のテストを返すぞー」

昨日行ったテストの結果が返ってくる。だが……！！

先生「今回のテストの結果を見るとみんなの点数は非常に悪い！」

先生が言った後、手には一枚の紙を持っていたそれはカツオのクラスのアverageが書かれてあった。

男子C「え〜〜！！」女子A「まじで！？超自身あったんでけど〜みたいな」

先生「なにが自信あったA（女子）おまえは2点だぞ！そしてG君どうしたんだ？クラスでトップだったおまえがどうしてこんな点をとったんだ！？5点しかないぞ！！」

なんと昨日のテストの点数がみんな悪いらしい。そしてカツオは・

カツオ「・・・やっぱり0点か・・・」

中島「おれなんか・0・5点だぞ。どうして小数点があるのかさっぱり分からないよ。っていうかなんで磯野より低いんだ!？」

先生「どうしてか知りたいのか中島。それはな普段は磯野より点を持っていたんだが、本当は磯野より点数が低いんだよ。つまり、おまえの本当の正体は磯野より点が取れないバカ中島だということだ。分かったかい？化けの皮が剥がれたんだよ中島（笑）」

先生はでたらめなことを言っているとカツオは思ったが、よく見ると中島は少しだが泣いていた。

カツオ「気にすんなよ。先生の言っていることは嘘に決まってるんだろ。なっ?」

中島「そ・そうだよな嘘に決まってるよな」

カツオの励ましで中島はいつもの中島に戻った。う〜ん、男の友情

は熱いね。」

と気にしないと思った二人だが、なんとカツオのクラス以外も全校の生徒の点数が急激に下がっている。

この点数結果を見た先生達は授業をしばらく休業し自習にして全校の先生達を集めて、緊急会議を始めた。

校長「これはいったいどういうことなのかね同道先生？」

おっといい忘れてたが、ここからアニメや漫画にはでていませんが、いろんな先生の名前が出てくるので、ご了承ください。

同道「はい先週行ったテストから我が学校の全校のクラス生徒達の平均点が一気に減少がおき始めたのです」

藤丸「しかし、このテストを作ったのは我々だぞ！生徒達に分かりやすく教えといたはずなのになぜこのようなことがおきたのか！？」

珊瑚^{サンゴ}「丁寧に教えた？はあ！？本当に教えたんでしょうね、でたために教えんじゃないの藤丸先生？」

藤丸「なっなんだと！？」

鮫田^{さめだ}「おちつけ！けんかをしにきたわけじゃないだろ？」

鯨男^{しやちお}「そのとおりだ。まずどうしてみんながこんな点を取ったのかを考えよう」

珊瑚「やっぱり、私達教師の教え方が問題ですかね。ねえ〜藤丸先生？」

藤丸「ムカツ」

鯨男「もしくははテストの問題が原因じゃないか？ほら特に最後の問題なんかこんなんだぞ！一体誰だ？」

鮫田「いえ、テスト問題用紙の責任者は磯野君達のクラスの先生じゃないのか？」

全員「そうだ！！」

先生「えっ？」

同道「もとわと言えは君だろ。テスト問題用紙は私が引き受けたと張り切っていたじゃないか！」

先生「ああ〜そ・そうでしたっけ？」

ドルフィン「YE S! ! Youガ、セキニソトラナキヤナリマ
セニヨリ〜タ! マンマミ〜ア! !」

中にはふざけた先生もいるがこうして緊急会議を学校の放課後まで
には終わらなかつた。

〜磯野家〜

サザエ「え〜みんなテストが悪かつた!? ラッキーじゃないでつか
ツオはどうだつたの?」

波ヘイ「バカモーン! ! サザエ! おまえだけ喜んでなにがおかしい
! ?」

サザエ「しいましえん」

マスオ「もしかしてワカメちゃんもそうなのかい?」

ワカメ「うん。急に点が悪くなつたの」

フネ「一体どんな問題だつたんだい?」

フネは興味心身でテストの問題を聞きにきた。そしてワカメは自分
のかばんからテスト用紙をみんなに見せた。

サザエ「プツ! ブハハハハハ! ! ! !」

問題用紙を見せたとたんサザエは爆笑し始めた。

波ヘイ「コラー! ! ! いいかげんにしろサザエ! おまえはもうこ
のはなしに首を突つ込むんじゃない! ! 向ここの部屋にいなさい!
! ! !」

波ヘイはすごくカンカンだ。おそらくこの点数と問題を見てむかつ
くのだろう。

フネ「一体誰がこんなことを?」

マスオ「もしかしてあの噂のテスト事件じゃないのかい?」

マスオはなにか知つてそうに言つた。

マスオ以外「テスト事件! ?」

タラちゃん「DEESEか?」

マスオ「あー。新聞やニュースで見たことがあるんだ。2年前、あ
る学校で事件がおきたんだ。その学校はとても優秀な学校だつたん
だけど、ある時テストが返つてきたんだがそのテストの点数は全校

生徒みんな悪いんだ。その後みんなその点数を見て猛勉強したんだがその時のテストの点数も悪かったらしく、もうだめだと全校生徒が突然飛び降り自殺をしたんだ。そしてその後その学校は核で破壊したんだ。どうしてそんなことがおきたのかは不明なんだ」

カツオ「そんなことがおきていたのか。ということはマスオ兄さんが言った「テスト事件」って俺達が今おきていることも!？」

波ヘイ「うゝむ、その可能性は高いのう」

波ヘイが始めて探偵みたいな台詞を言った。

ワカメ「じゃあ、このテストを作った犯人は先生?」

カツオ「分からない。だが、もう犯人も目星はついている。犯人は2年前もおこした。つまりこのテストも同じ犯人がやっている物かも・・」

サゼエ「あんた、なに探偵みたいになつてしゃしゃり出してんの?」

波ヘイ「サゼエ!おまえはまだ反省しておらんのか!？」

サゼエ「いいえ、お父さん、もう反省しております」

波ヘイ(嘘つけ!)

カツオ「絶対、犯人を捕まえてやる。もし捕まえなかつたら、また他の学校でもおきるかもしれない」

カツオはこの「テスト事件」の犯人は学校の先生達の中の誰かだと予想した。

さあ、一体どうなるのだろうか。

第2話(前編)〜完〜

おまけ

サゼエ「でも、その事件がおきてもおきなくてもカツオのテストの点数は変わらないわよねえ」

カツオ「うるさいな」

タラちゃん「これ以上カツオお兄ちゃんの悪口を言ったら僕が許さないDEASEE!」

サゼエ「ちがうのよ、タラちゃん」

ここでタラちゃんは再びあのノートを取り出した。

タラちゃん「D E A S E」

バタっ！！

サザエ死亡 死因「心臓麻痺」

第3話（後編）に続く。

第2話「テスト事件（前編）」（後書き）

みんなをどん底に陥れてしまう変わった事件です。ここでカツオはこの謎の事件を解決しようとしています。後編もありますのでお楽しみ！！

第3話「テスト事件（後編）」（前書き）

第2話「テスト事件（前編）」の続きです。

第3話「テスト事件（後編）」

カツオは今おきている事件の犯人が学校の先生達の中の誰かと推測している。

そこで、中島に電話して明日の時間割を聞くとなんと明日もテストをすると知った。

カツオ「俺らの学校はテスト尽くしかっ！」

カツオは一人でつつこんだ。

サザエ「なにがテスト尽くしなの？」

そこでサザエが現れた。

カツオ「姉さん、実は中島に明日の時間割を聞いたら、明日もテストがあるんだって」

サザエ「ふ〜ん。そうなの、まっあんたはずうつと0点取っているから、関係ないんじゃない？」

サザエは前回のことをちつとも反省していなかった。（詳しくは「テスト事件（前編）」を見てね。）

それでもカツオはサザエの言葉を耳に入らなかった。今はテストより事件の犯人を見つけることに集中していた。

〜そして次の日〜

テストが始まった。今回のテストはみんな自身があるそうで、みんなは徹夜をして勉強に励んだそうだ。でも、カツオと中島の二人はテスト勉強を1分もしてないのでできるわけがない。それに、やつても点数は悪いと判断をした。

今回のテストは理科だった。その内容はカツオのクラスで先月、理科の実験で行った電気・植物・物質の分解その他もろもろ。みんなはそれを予想して猛勉強したのだが……

テスト当日の次の日、理科のテストが返ってきた。その結果……
・駄目だった。

男子D「Shit!どうしてなんだよ!!!」

女子C「イヤ〜ン！なんでこんな点が出るの？わかんない」
やっぱり今回のテストもみんなだめだった。カツオは今回もおきることはもう知っていた。

なぜならマスオ兄さんから聞いた情報によるとテスト事件がおきた以降、ずうつとおこっつていまうそうだ。

ガラガラ！

扉の音を聞くとみんなは一瞬しーんとした。そこにあらわれたのは・

???「いんにちほHello!!みなさんEveryone!オゲンキデスカンデ
チ？」

出てきたのはこの学校の英語の教師ドルフィン先生だった。あの人は相変わらずテンションが高い先生だった。

カツオはドルフィン先生を警戒をしていた。もしかして犯人はドルフィン先生じゃないかとそう思っていた。するとドルフィン先生は自分が凝視されていることをよんで顔をカツオに向いた。

ドルフィン「Who are you?あなたイソノサン。ドウシテワタシヲミルンデスカ？」

モシカシテ、イマオキテイルジケンノハンニンガワタシダトオモツテイルンデスカ？」

カツオ「・・・」

ドルフィン「No!!ワタシジャアリマセニヨリター！ソナコトヨリ、コノコトハアナタニハカンケイアリマセン」

その言葉を聞くとどうもあやしいとカツオはにらむ。

中島「ドルフィン先生を見て、どうしたんだい？」

カツオ「おれさあ、犯人がドルフィン先生じゃないかと思ってるんだけどさあ。」

中島「えっ！それはありえないよ磯野。もしこの事件の犯人が彼だつたら今ごろ大声でさげんで自ら刑務所に逝ってるよ」

それもそうだなとカツオは納得した。今カツオが知っている先生達は「カツオのクラス先生」・「同道先生」・「藤丸先生」・「珊瑚先生」・「鮫田

先生」「鯨男先生」「ドルフィン先生」「校長」その他にもいるがカツオはこれくらいしか知らない。

カツオ「絶対、おれが知っている先生達の中の誰かが犯人なんだ」

中島「磯野、もうそこまで把握しているのか？すごいな。毛利事務所で弟子入りしてもらったら？」

カツオ「バカいうなよ中島。……おれは……名乗るほどでもない小学生さっ」

中島「かつこいいい!!」

ドルフィン「コラソコノフタリ!!シズカニシナサイレン!!」

……っということでもカツオと中島で話し合った結果、夜学校に行つて探りに行こうということになった。

その夜

カツオと中島の2人は近所の公園に集合した。

カツオ「ごめんな。いっしょに付き合ってしまった」

中島「いいんだよ。それになんか面白そうだしな」

と2人の話は終わり学校の近道でもある裏道から入って一気に学校の門までたどり着いた。

カツオ「事件の手がかりをつかむには夜この学校にしのびこむしかない」

中島「なるほど、事件を解決するには夜の学校に入るしかないもんな」

カツオ「それともうひとつ……」

中島「もうひとつ……」

カツオ「かおりちゃんを安心させるためだ!」

中島「ガクッ」

カツオ「このまま放っておいたら、かおりちゃんが死んでしまうんだよ!!」

中島「でっでも、もしかおりちゃんが死んでたら？」

カツオ「死んだときは花沢さんだろうが誰だろうが付き合つてやらあ!!」

これはもうカツオにとっては、自分の命よりかおりちゃんの命がかかっていてみたいだ。

「つか自分はどうなってもいいのか!？」

カツオと中島は2人のコンビネーションで門おも軽々と超えてしまい、学校に向かった。

まず2人が向かうのは職員室。そこに行けばなにか分かるかもしれないとカツオはにらんでいる。ただいま2人は廊下にいる。

中島「なあ磯野。内の学校の廊下ってこんなに長かったけかな?」

カツオ「さあな、おれらはいつも廊下を走ってるから逆に歩いたら長く感じるからじゃないのかな」

それを聞いた中島はなるほど納得した。しばらく長い廊下を歩き続けた2人はなにか足音のようなものが聞こえた。

・・・トコ・・・トコ・・・トコ・・・

中島「なんか聞こえるぞ磯野。」

カツオ「ヤバイ!!見回りの人が来る!どこかかくれる!」

どこかかくれるといってもそんなかくれる所などなかったと思ったその時、近くに掃除とかによくある掃除道具入れがあった。

カツオ「あれだ中島!あそこにかくれるんだ!!」

中島「え〜でも、2人は無理じゃないか?」

トコ・・・トコ・・・トコ

だんだん足音が近づいてくる。

カツオ「いいから入るんだよ!いうこと聞かなかったらおまえの恥ずかしいあれをばらすぞ!」

中島「わかったよ」

なにか物音を感じた見張り人はさっきより早歩きした。しかし、物音がしたところにはなにもなかった。そう、2人はみごとに掃除道具入れの中に入り込むことに成功したが、やっぱりぎゅうぎゅうで狭かった。それもがまんして、ドアの隙間から見張り人の様子を見た。見張り人をよく見たら(カツオのクラスの)先生だった。

そういえば、今日の見張りの当番は先生だった。どうして今日は先

生が当番だつて知っているのかが不思議だ。

先生「う〜ん、気のせいかな？」

そういつて先生の足音が小さくなるまで待ち、おさまり終わつたらようやく2人は掃除道具入れから出た。

中島「うえ〜なんだつたんだあの臭いは・・・」

カツオ「まったくだよ！バケツの中には水がありっぱなしだししかもその水は腐つてるしこんなもの食べ物の近くに置いてあつたらすぐに腐食しちまうよ！」

臭い思いをした2人は5分ぐらいでようやく目的地の職員室にたどり着いた。

カツオ「おー、事件の臭いがするぞ！」

中島「えー？なんで分かるんだ、おまえは犬か！」

カツオ「誰が犬じゃっ！！」

2人のくだらない漫才の後、職員室の扉をゆっくりと開けた。

カツオ「誰もいないよな？」

中島「OKみたいだよ」

誰もいないことを確認した後扉をゆっくりと閉じて2人はゴキブリのようにコソコソと歩いた。するとなにか人影が見えた。職員室にはまだ誰がいるのか？そう思った2人は音を立てないように覗いた。その謎の人影はコンピューターを使ってなにかを作っていた。

なにを作っていたかというそれは明日行うテストを作っていたそうだ。その内容はなんと誰も分からないような問題やでたらめなことがかかれていた。それを見た2人は小さい声でおどろいて、先生の机の上にあつた花瓶を落としてしまい、バリントと音をしてしまい2人はつい「わっ！！」「っ」と大声で言っしまい謎の人影にばれてしまった。

????「誰だっ!？」

もう後戻りはできない。そう思ったカツオはかくれていた机から出た。

カツオ「お前はそこでなにをしている!？」

カツオがそういつて中島もあとから出てきた。

「???」きみたちは、・・・磯野くんと中島くんじゃないか?」

謎の人影は2人を知っていた。ポケットに入れた小型懐中電灯でその人に向かって照らした。その謎の人影の正体は(カツオのクラス)の先生だった。

カツオ「も・もしかして犯人は・・・先生・・・?」

先生「君たちどうしてこんなところにいるんだい?とつくに下校時間には過ぎてているぞ」

中島「先生の質問を答える前にこっちの質問に答えてよ!どうしてこんなことをするんだ!?」

先生「ハッハッハッ。何を言っているのかな中島くん。これが先生の仕事だよ」

中島「だってそのコンピューターのモニターにかいてあるテストの問題むちゃくちゃなことがかいてあるじゃないか!」

先生「いやいや違うよ中島くん。これは先日行ったテスト問題を訂正していたのさ」

中島「おっなるほど」

ポンつと拳をもう片方の手に乗せて軽く納得した中島だったが、カツオ「いやっ!!だまされるな中島!こいつは先生なんかじゃない!!!」

中島「えっ!?!?」

先生「おいおいなにをいうのかね磯野くん。わたしは正真正銘きみたちの先生だぞ」

カツオ「先生はおれたちを君付けをしないし、なんていうかオーラがないんだよ。「先生のオーラ」が」

中島「な・なんだそりゃ?」

カツオ「おれには分かるんだ。先生とは長い付き合いだから先生のオーラが分かるんだ!」

「???」「そうかそれは知らなかったな。これだから子供というのはうぜいんだよ!!!」

先生？は突然変な声に変わった。すると自ら顔を引き裂いて皮をとったではないか。そしてその皮をどこかにポイツと投げ捨てた。よく見るとその皮は先生の顔だった。これは変装するときを使うマスクだった。2人はマスクを投げ捨てた犯人を見た。その顔は見たことがなかった。

カツオ「おまえだな！2年前の事件も起こした犯人は！！」
???「ほー、どこかでおあいしてないのにおれのことを知ってるなんておれも有名人になったもんだな！」

中島「磯野、だれこの人？」

カツオ「2年前のテスト事件もおこした犯人だ！」

中島は知るよしもなかった。

カツオ「マスオ兄さんから聞いたんだその記事に顔と名前が写ってたから覚えてる。真犯人の名前は・・・花器かき加絵田かえただな！！」

花器「フフツ。そのとおり正解だよチビな探偵さんよ！」

カツオ「どうしてこんなことをするんだ？人のテストの点数を減らしてそんなに楽しいのかよ！！」

カツオは花器にそういった。花器はこう答えた。

花器「楽しいね！クソガキどもががんばった結果をみてどんぞこに落ちる様子を見るのはすごいたのちい！！」

中島「なんかこの人おかしいぞ？」

花器「おれの正体を知ったごほうびとしておれの昔ばなしをしてやるわ」

昔々あるところに花器という一人の少年がいました。少年はある学校の生徒の1人だった。でもその少年はみんなから毎日のようにいじめられたり暴力をふるわれたりした。

ある学校の授業

先生A「はい、この問題分かる人は？」

花器「はいっ先生！答えは9です」

先生A「違います」

生徒B「ガハハハ、おまえ間違えてやんのだっせー！！」

生徒H「全くね、あんな問題だれでも分かるのにね」

生徒O「花器くんって見かけによらず頭が悪いんだね」

先生A「静粛に君たち！いいかい花器くんこの問題の答えは9じゃなくて10だよ。」

花器「はい・・・」

学校の放課後

花器は男子生徒3人に体育館裏に呼び出された。まあ、これはいつものパターンである。

ドコッ！バキッ！ボゴッ！！

花器の体はボロボロで血まみれだった。

生徒X「おまえさあ、毎回毎回うざいんだよねー」

花器「どっとうして？」

生徒Y「だって、あんた他の生徒よりチビだし頭悪いし生意気だし
花器い・い・み・ん」

生徒Z「そうそう花器くん、また2000円貸してくんないかな？」

花器「えっ、まっまたですか？これでもう10回目だよ・・・」

生徒Z「だってさあどうしても勝てないゲームがあつてさあそれにこつてさあ、おねがい」

花器「はい」

花器はすんなりと2000円を生徒Zに渡した。

生徒Z「ありがとね花器くん。それとね・・・」

と生徒Zは突然花器を思いつきり腹をけた。

生徒Z「いちいち回数なんてかぞえてんじゃねえよ！！今度言つたらしばくぞコラー！！」

紹介しよう。この3人は花器をパシリにしている3人衆である。

生徒X・生徒Y・生徒Zこの3人は学校近辺ではとても有名ならしい。
(別の意味で。)

それから花器の毎日の日課はほとんどがいじめである。給食時間でもカレーなどにミミズを入れたり、トイレに入っている最中におそわれてトイレのなかに閉じ込めたりなどとても幼稚だが彼にとって

はとても最悪だった。

ある日花器はこう言った。

花器「復習してやる……」

「復習」そう彼は言った。花器がその言葉を言った後に花器は変わった。

次の日の朝

花器は一番のりだった。ある生徒達の机に爆弾をいれた。そう生徒X・Y・Zだ。

するとその3人は教室に入り、机に座った。すると……

ドカーン！！

ものすごい爆発音がした。しかもそれが3回も続いた。そう、3人の机の中に入っていた爆弾が爆発して3人は死亡した。

これで今までの恨みははらせたと思ったがまだ花器の復習劇は終わらなかった。

それから次々と花器をいじめた生徒を一人一人殺していったのだった。

それを知った先生は警察をよんで逮捕してもらおうとしたが、花器は窓から飛び降りた。

それを見た先生はいそいで窓を覗いたが、花器の姿がなかった。

それ以来、花器は行方不明となったが、ある事件で花器の姿を見たという人がいてその事件が新聞にドンッと載った。その時花器をみたのは花器が小学校以来で25年ぶりらしい。それから花器はいろんな学校に忍び込み、たくさんの子どもの命を落としたり。

花器「そしておれが今いるこの学校で5件目というわけだ。めでたしめでたし」

カツオ「なにがめでたしだよ！他の子どもの命も落としたというのか！？」

花器「そうだよ。子どもを殺したってなにもおきないじゃん？いいじゃんかYO！！」

カツオ「さあて、そろそろはなしの本題に入ろうじゃねえか」

中島「事件の犯人もわかったことだしあとは警察に連絡するだけだね」

これでテスト事件は終わりを迎えたと2人は思ったが、花器「警察に連絡？そんなことしてもいいのかな？これをみな！」と花器は指をさしてその指はもう一人の人影を向いていた。その人は・・・

かおり「〇ンメー！」

「かおりちゃん!?」もう一人の人影の正体はカツオのクラスにいた女子かおりちゃんだったのだ。

花器「警察に連絡してもいいのかな？この女がどうなってもいいのかな？」

なんと花器はかおりちゃんを人質にしていた。まさに犯人がやりそなな行動だ。

中島「おまえ、かおりちゃんを人質にとりやがって！」

それだけでなく花器は服の内側ポケットから護身用のナイフを持っていた。そのナイフでかおりちゃんの首に突きつけた。

かおりちゃん「!!!!」

カツオ「やめろ！言う通りにするから、かおりちゃんを放すんだ！」

花器「じゃあまずはそのこのコンピュータの近くにある印刷機の印刷ボタンを押すんだ」

とカツオに指示をしてカツオは花器の近くにある印刷機に向かった。花器「そのボタンを押せば第5回テスト事件の最終段階に入る。印刷機から出てくるテストの問題用紙が出てくる。つまりこのテストをこの学校のカギどもにやらせれば、この学校は崩壊する！」

なんだかよくわからないが、簡単に言えば印刷機から出てくるテスト用紙それを明日全校のクラスに配ってみんなにやらせる。もしそうしたらマスオ兄さんが言っていたとおり自分でコントロールできなくなり全員自ら飛び降り自殺をする。全校の生徒が自殺した後、核で学校は破壊されてしまうのだ。

花器「さあ、押せよ！ボタン押せよ！！テメエの彼女の首が跳ねちまうぜ！！！」

カツオはもう印刷機のボタンのそばに立っていた。どうすればいいのかもう自分では決まらなかった。すると・・・

カツオ「なあ中島。ボタン押せばいいのか、押しちゃだめなのかどっちがいい？」と中島に聞き始めた。

中島「はあっ！？なんでおれに聞くんだよ！？」

花器「おいハゲ！相談してんじゃねえよ！選択肢は押すか押さないかどっちかしかないんだぜ！さっさと決めろや！」

カツオ「わかつてるけどでも・・・でも・・・」

花器「ああん！？よく聞こえないな」

カツオ「・・・でもやっぱり・・・どっちも選べないよ！！！」するとカツオは花器に向かって突っ込んで体当たりを与えた。

花器「ぐわっ！」

花器はカツオの体当たりでバランスは崩れ花器とかおりちゃんは倒れた。その隙にカツオはかおりちゃんを救出した。

カツオ「もう大丈夫だよ」

かおり「こわかったよー（泣）」と大泣きしていたとても怖い思いをしたんだなとカツオは思った。

花器「クソッ！これだからガキは嫌いなんだよ！！言う通りにしないならおまえは用済みだこの場で殺してやるわ！！！」

すると花器は服の内側のポケットからナイフを出した。カツオは花器の近くにいたのでカツオが狙われた。

花器「死ね！！」花器はナイフをカツオに向かって振った。

カツオ「うわー！！！！」これでもうだめか！そう思ったがその時花器「うっ・・・！！」

花器は自分の胸を押さえながら苦しそうに倒れた。この感じどこかであったようなカツオはそう思った。すると誰かが職員室に入ってきた。

タラちゃん「間に合ったD E A S E」なんとタラちゃんが現れた。

そうタラちゃんは手に持っているノートの力を使ってカツオを救ったのだ。

バキッ！バキッ！

なにやら物を壊す音がした。それは花器が使っていたコンピュータを中島がバットで破壊したのだどこからバットが出てきたのかわからなかった。

しかし、花器は死んでいなかった。「うっ・・・」まだ息をしていたのだ。タラちゃんは花器を殺さず意識を失わさせただけだったのだ。タラちゃんは犯人を殺さず生け捕りにして刑務所に連れて行くこうとしていたのだ。

タラちゃん「犯人は生け捕りにするD E A S E」

こうして2人の小学生と一人の子どもの活躍により花器は逮捕されテスト事件は解決した。

その後本物の先生は花器が掘った学校の真下にある地下牢で発見された。やはり花器は（カツオのクラスの）先生に変装してみんなを混乱に落とし入れたのだ。

→テスト事件が解決された次の日

日直「規律！姿勢！礼！」

クラス全員「おはようございます！！」

先生「はい、おはよう。磯野と中島のおかげで事件は解決してくれだね。ありがとう！」

パチパチパチパチパチ

「いや〜どーも」

先生「いやーみんなには非常に迷惑をかけてしまったからお詫びとしてみんなにプレゼントしないとな」それを聞いたみんなは大喜びだった。

男子U「先生！なにくれんの！？」

女子J「もしかして化粧品！？」

先生「いやいやそんなもんじゃなくよもつとすごい物さ」

どうやらただものではないらしい全員で「なんなの？」と聞くと先

生は答えた。

先生「みんなにやってもらったための本物のテストだ！」
ドドッ！！

全員でズッコケた。

先生「いや〜ずいぶん溜め込んでしまっただなテストは1週間あるからがんばれよ。じゃっ！始めるぞ！！」

全員「え〜〜！！！！」

カツオ「もうテストはこりこりだー！！！！」カツオがそう言うとかおりちゃんは小さくクスツと笑った。ようやくカツオ達のクラス達に再び笑顔ができたのだった。めでたしめでたし。

第3話（後編）〜完〜

第3話「テスト事件（後編）」（後書き）

みなさんは好きじゃない人がたくさんいると思いますが、テストは好きですか？自分は嫌いです。テストなんて滅べばいいのに、テストなんて生まれてこなきやいいのにつと思ったりします。

テストによって自分の生活をボロボロにされてたまるか！！

・・・え、今回はテスト事件の後編でしたがカツオが事件の真犯人を見つけてましたね。舞台は深夜の学校でしたが、怖いですよね！おそろおそろ歩くとい後ろを振り向いてしまいますよね。（自分を行ったこともやったことありません。）では次回をお楽しみ！

！！

第4話「電話」(前書き)

いつも平凡な毎日を過ごしている磯野家にトラブルや事件に巻き込まれる物語です。

第4話「電話」

この前のテストの連続でカツオとワカメは部屋でお疲れモードです
うっと動こうとしなかった。

マスオ「いやー、あの事件を解決するなんてカツオ君やるねー」

マスオは感心そうに言った。

サゼエ「やるねじゃないわよ！夜中、家から飛び出しちゃってカツ
オが夜逃げしたのかと思っただわよ」

マスオ「でもそれってすごいことじゃないかなあの事件は有名な探
偵でも解決できなかったんだから。」

サゼエ「まっまじで！？」するとサゼエは一瞬いやな笑みをした。

それはそうと先生に言つとかないと思いかツオ達の部屋の前にある
電話をかけようとしたのだが。

サゼエ「あら？」学校の電話番号をうつっているのにかからなかった。

サゼエ「まあいやだ、もしかして壊れちゃったのかしら？」

磯野家にある黒電話は昭和物なのでとても古かった。

サゼエ「あなたー。電話が壊れたんだけど」サゼエはマスオを呼ん
だ。

マスオ「んー、これはもう古いからね。寿命がすぎたな」

いつものようにみんなでご飯を食べていた。そしてサゼエは磯野家
の電話についてみんなに相談した。

波ヘイ「ほー、そう言えば確かに最近つながらない時があるのう」

タラちゃん「こわれちゃったですか？」

マスオ「うーん、まだわからないけどその可能性は高いねえ」

フネ「もう電話もお疲れだからねえ」

カツオ「新しい電話買ったら？最近の電話はすごく進化しているか
らここは奮発して新しい電話買おうよ」

ワカメ「わたしも同感よ。だってあの電話気持ち悪いもん」

タラちゃん「電話さんをバカにしないでください!」

ワカメ(しつしまつた!つい本音が・・・)

タラちゃん「DEASE」

バタツ!

ワカメは夕食を食べる最中にあの世に逝った。

サゼエ「そうね、新しいの買おうかしら」

カツオ「やったー!」

するとマスオはサゼエにアドバイスみたいなことを言った。

マスオ「ちなみに昭和の黒電話はオークションで売ったら数万するらしいぞ」

「「え〜!」」

それを聞いたカツオとサゼエは驚いた。

カツオ「でっでもさあもうちょっと今のままであの電話使おうよね
姉さん?」

サゼエ「そうわよね(プレミアがつくまでのしんぼう)」

電話は古くてもプレミアはつきません。

フネ「そうね、電話はつかってもらわれるのがうれしいからね」

タラちゃん「電話さんは売っちゃだめです」

次の日サゼエは今日近所のスーパーでバーゲンを開催していると聞きつけて買い物に行った。

サゼエ「まあ野菜がこんなに安くなってる!世の中いいことあるわね」

スーパーでは特ににんじん1本50円・キャベツ78円などお菓子類もすごく安かったのだ。それを見たサゼエは興奮するかのようにながっポリカートのなかに詰め込んだ。数分で商品がほとんど売り切れていた。重い荷物を掲げながら帰るサゼエだったが、そのとき一人の男性が「ちよつとそこの奥さん!」と声をかけてきた。

サゼエ「あたしのこと?」

男性「はいっ!あなた以外だれに声をかけているというのですか?」
サゼエ「っであたしになにか用かしら?」

男性「よくぞ聞いてくれました！！本日はどこのスーパーも特売サービスなのでわが電気屋でも特売サービスを実施しております！！」

サザエ「まあそうなのどんなの売っているの？」

サザエは興味があるように男性に聞いた。

男性「はいっ奥さん！本日の特売サービスは電話でございます！！」

サザエ（電話かあそういえば昨日電話のこと話していたしついでに買って帰ろうかしら）

男性「その目もしかして新しい電話をお買い求めですか？」

サザエ「えつまつまあそのとおりよ。よくわかったわね」

男性「顔に書いてあるので言わなくてもわかりますよ。電話でしたらこちらの商品がお買い得ですよ！」

すると男性はピカピカの電話をサザエの前に置き、商品の説明を始めた。

男性「こちらピカピカな電話名づけて「ピカ電」という商品でございます！この電話は近所や親戚だけでなく世界中でもこの電話一本で会話をすることができます！それだけではなく、長電話などをするとときにかかる電話代がなんとタダ！つまり何十分何時間でも会話することができます！！」

サザエ「まあこれはすごいわ！」

男性「このピカピカな電話名づけて「ピカ電」の値段は普通何十万しますが奥さんだけ特別に3万円で売ります！！」

新品の電話は何十万するのにたったの3万で買えると聞いたサザエはもうこの電話を買わざるをえなかつた。

サザエ「買います！」とサザエはそう言って財布にはちょうど3万あったのでそれを男性に渡した。

男性「毎度ありがとうございます！！」男性はうれしそうに言った

後サザエはかばんから家にあつた黒電話を取り出した。なんで電話をかばんの中に入れるんだ！？そこでさらに新しい電話を買うついでに電話を売ろうとしたのだ。その電話を男性に見せて鑑定させてもらおうと・・・

タエコ「どうしたの？」

サザエ「なんでもないの。実は聞いてよ昨日ね新しい電話を買ったのよ！」

タエコ「へえーよかったわね」

そうサザエはタエコおばさんといっしょに長電話をした。その会話が続いて10分後タエコおばさんがこんなことを言った。

タエコ「あのさあ、お金いくらあるの？」

サザエ「えっ？」まさかタエコおばさんがそんなことを気にするのはとてもめずらしかった。サザエはいくら持っていると言われ正直に答えた。

サザエ「財布に7万と後へそくりが10万そして隠し金庫には50万あるわ」

タエコ「・・・67万・・・あるのね？」

サザエ「まあ単純に計算したらそうなるわね」

しかしサザエは財布の7万だけでなくなんと隠し金庫まであったというのだ。しかもそのへそくりはカツオですら知らないという。

サザエ「でもどうしてそんなことを聞くの？」

タエコ「実はあの人借金かかえているのよ」

その発言を聞いたサザエさんは驚いて声もだせなかった。

サザエ「なにがおきたの？」

タエコ「あのひと最近競馬にはまっていたのよ。でもね全部失敗したらその後借金とりたての人達が来てもうこんな生活たえられない！」

まさか・・・あの焼肉ばかり食べていたノリスケメタボおじさんが借金をするのは信じられなかった。・・・だが！親友が困っているのならほおっておけない。そこでサザエは。

サザエ「3万ずつでどう？」

タエコ「いいの？」

サザエ「当たり前よ親友が困ってるのにほおっておけないわよ！」

タエコ「ありがとう・・・。じゃあピカ電にあるファックスシステム

ムのボタンを押して」

サザエ「このことかしら？」

そう思つてピカ電の横にいくつかのボタンがあつた。そのボタンには「ファックス」とかかれてあつた。そのボタンを押して見るとピカ電が突然変形し始めて本物のファックスの形になつた。

タエコ「そのファックスにお金を入れたらわたしの元に来るわ」

そう言われタエコおばさんの指示に従つて3万円をファックスに入れた。

タエコ「無事届いたわありがとう」

サザエ「早く借金なくなるといいわね」

タエコ「ええ、そうね……フフッ」

最後にそう言つて切れた。でもこの機能を使えば、取られることもなくタエコおばさんの元に送れる。これを繰り返し返せばノリスケおじさん達は借金から逃れるとそう思っていたが、サザエは自分が間違つたことをしたことも知らなかつたのだつた。

第4話 完

第4話「電話」(後書き)

今回の物語は電話のことについてでした。磯野家の電話昭和物の黒電話ですね。

家の祖父母の家の電話は黒電話なのですが、あのジリリとなる音はとてもいいです。まさに自分が昭和時代の子供だと感じたりします。

第5話「裏切り」(前書き)

第4話「電話」のお話の続きです。

第5話「裏切り」

タエコおばさん達が借金をかかえていると聞いたサザエは3万円ずつピカ電のファックスシステムでタエコおばさんの元へ届ける方法でやったが、かれこれもう1週間たった。そもそもタエコおばさんはいくら借金をしているのだろう。それがとても気になっていたのでまたタエコおばさんに電話をかけてみた。

ブルルルブルルル　カチャツ　電話がかかった。

タエコ「もしもしタエコですけど」

サザエ「もしもしあたしよ。ちょっと質問してもいいかしら？」

タエコ「どうぞ」

サザエ「あなたの所いくら借金しているの？」

タエコ「!？」

サザエ「最初の時それを聞くの忘れてね。それであといくらいる・

」

タエコ「あのさあまたお金お願いできるかしら？」

サザエ「えっ？あつああ今から3万送るわ」そう言っつてファックスでまたタエコに3万送った。

タエコ「サザエさん・・・いつも・・・ごめんね・・・あたしのために・

・・・(泣)」

サザエ「なに言っているのよ！あなたが誤ることなんかないわ。悪いのは借金しているノリスケさんの方よ」

タエコ「サザエさん・・・あの人を責めないで！あの人は悪くないわ」

ノリスケはタエコおばさんのことすごく愛しているそうだ。

サザエ「ごっごめん・・・じゃあね」

サザエは電話の受話器を戻した。するとカツオが学校から帰って来た。

カツオ「ただいま！」

サザエ「おかえり……。今のサザエはいつもの元気なサザエではなかった。

カツオ「どうしたの姉さん？具合でも悪いのかい？」

サザエ「いいえなんでもないわ……。さあって夕食の支度でもしよ
うかしら」

サザエはすぐにいつものテンションに切り替わった。

カツオは首をかしげながら自分の部屋に入るとそこにはもうワカメ
がいた。

ワカメ「どうしたの？お兄ちゃん」

カツオ「ああ！なんだワカメそこにいたっけ？」とワカメにふざけ
た質問してみると

ワカメ「ああん！？なにいつてるのわたしが風邪ひいてるの知って
るくせにお兄ちゃんけんか売ってるの？」

また再びカツオとワカメの口げんかがはじまるのかそう思ったが・

カツオ「別に……。ただふざけてみただけだよ」

ワカメ「もう一度言っとくけどあたしは今日風邪ひいてるんだから
よらないほうが身のためよ」

カツオ「はあっ！？ただの風邪じゃないっての？鳥インフルか？そ
れとも今ちまたで噂の新型インフル（豚インフル）か？」

ワカメ「そんなちゃっちいもんじゃないわよっ！！」

カツオ「じゃあなんだってんだよ！？」

ワカメ「 - ウィルスよ」

カツオ「まじでっ！？うわっよるな！！ゾンビになっちゃう！！！」
説明しよう。「 - ウィルス」とは、Tyrant - Virusの

略でそのウィルスに感染するとゾンビになってしまう。
ワカメ「嘘よ。そんなに驚くことないじゃないのバカね感染してた

らとつくにゾンビになってるわよ」

カツオ「確かになおまえの方がもっとふざけてんじゃなか！！！」

ワカメ「お互い様つということよ」

相変わらずこの2人は本当に似ている。

カツオ「そう言えば姉さん気分悪そうだったけどどうしたの？」

ワカメは首を左右に振っていた。ワカメも事情をよく知らないが

ワカメ「実はお兄ちゃんが帰る前にお姉ちゃん、タエコおばさんと電話していてねその話聞こえてたの。」

カツオ「なんの話してたんだよ？」

ワカメ「タエコおばさん・・・借金しているそうなのよ・・・」

カツオ「なんだって！？あのいつも焼肉を食べていたノリスケおじさんが・・・そ・・・そんな」

ワカメ「なんか3万円ずつ渡してるそうなのよ」

カツオ「3万！？だって姉さん7万しか持ってないはずなのにしかも3万ずつ？でもどうして知ってるんだおまえ風邪ひいてるから外出れないじゃん。」

ワカメ「あの穴から覗いてたのよ」と向こうに指さした。するとそこには穴があった。その穴は第1話でサザエがカツオ達の様子を伺うために仕掛けた穴「IMA」だった。詳しいことは第1話をご覧ください。

カツオ「なんか怪しいな俺たちには内緒でなんかこそそしているかもな」

ワカメ「謎ね」

カツオ「もうちょっと様子を見てみるか」

カツオとワカメはサザエの様子をコソコソ探りあらゆる情報を摂取した。すると、2人は知ってしまった！！

カツオ「なんてこった・・・。」

ワカメ「どうしたの？お兄ちゃん」

カツオ「姉さんの奴おれにだまってあんな大金を隠し持っていやがって・・・おれの貯金より多い・・・」

ワカメ「お兄ちゃん本当にお金しか興味ないのね・・・」

カツオ「しかも毎日3万円ずつタエコおばさんの所へ輸出してるん

だぞー！せこいじゃん！」

なにがだ・・・？

カツオ「でもやっぱりおかしいよ！あの焼肉ばかり食べて生きて
いるノリスケおじさんが急に借金するなんてありえない！！」

ワカメ「まあ、そう言われてみればそう・・・なの？」

カツオ「おれの記憶ではノリスケおじさんは競馬はしない！もしす
るとしたら、ドームジンをボヤスクツをやってるよ！！」

ワカメ「お兄ちゃん、ノリスケおじさんのことに詳しいわね・・・

（キモツ！！）」

カツオ「おれは認めないぞ！ノリスケおじさんが借金をするなんて・

・あの人は成金王者なんだ！！

おれの尊敬する人物〓成金王者〓ノリスケおじさん

ワカメ「なにを言ってるの？」

カツオ「おれ、タエコおばさんの所へ言ってくる！」

そう言つてカツオは慌ててタエコおばさんの家へ行った。家から走
つてから10分後・・・

ドンツ！ドンツ！カツオは大急ぎでドアを叩いた。

カツオ「タエコおばさん！いるー？」

するとドアが開き、そこにはタエコおばさんが出てきた。

タエコ「どうしたのカツオちゃん？」

カツオ「ハアハア・・・タエコおばさん・・・ノリスケおじさんは借

金してるつて本当！？」

タエコ「えっ？いいえそんな話しないわ」

カツオ「えっ！？だって姉さんがタエコおばさんに3万円ずつ渡し

てるじゃんっ！」

タエコ「3万円ずつ？そんなお金もらってないわよ」

カツオ「え！？」

カツオは信用できなくてタエコおばさんの家の中を見してもらい、
探したが3万円以上の大金がどこにもなかった。

タエコ「一体サザエさんがなにをしたつていうの？」

カツオは調べた情報を頭でまとめてみた。その結果

カツオ「まずい・・・姉さんだまされてる！」

タエコ「え？」

するとカツオはすぐにタエコおばさんの家をすぐに出て自分の家へもどった。

ガラガラ！

カツオ「姉さん！だめだそれ以上お金を渡しちゃだめだ！！」

ワカメ「What happen?（どうしたの?）」

カツオ「おまえ、英語しゃべれるっけ？」

ワカメ「バカにしないでよ。これでもドルフィン先生に教えてもらって編み出したのよ」

カツオ「っーかつんなことどうでもいいんだよ！姉さんは？」

ワカメ「そーだった。実は大変なのよ！お姉ちゃんが・・・」

ワカメはカツオがタエコおばさんの家へ行ってる間におきたできごとを話した。

あの時、一本の電話が鳴り、その電話はサザエが受話器を取った。

サザエ「もしもし？」

タエコ「もしもしあたしよ」

サザエ「あら、今日はもしかしてまだ足りなかった？じゃあさらに3万円送るわね」

タエコ「サザエさん・・・今会えるかしら・・・」

サザエ「ええ。会えるけど、どこで？」

タエコ「黒山ビルっていうところ知ってる？」

サザエ「知ってるわ。最近できたビルでしょそれがどうしたの？」

タエコ「その黒山ビルの中で会いましょう・・・後残りのお金を全額忘れずに・・・」

ブツッ！

それから、サザエはタエコの言うとおりに従い黒山ビルへ向かった。

カツオ「その黒山ビルってどこにあるんだ？」

ワカメ「確か駅の近くに建ったと思うんだけど・・・」
カツオ「なりふりかまっつてられねえ！おれは行くぜ！！」
カツオはさっきタエコおばさんの家から帰ってきたばかりなのにまた走らなければならなくなってしまう。しかし、カツオの体力はもうほとんどないに近い。するとそこにタラちゃんがいた。
タラちゃん「どうしたんですかカツオ兄ちゃん？」
その時タラちゃんは三輪車に乗っていた。カツオはその三輪車を見たあと、
カツオ「タラちゃんその三輪車かしてくれ！」とカツオは無理やりタラちゃんをどかして三輪車に乗った。
カツオ「いくぜー！！」
とは言ったものの三輪車では駅まで行くのは日が暮れてしまう。それにもかかわらずカツオは三輪車をこいだ。
カツオ「いや〜三輪車は最高だね・・・つておれをなめとんかコラー！！！」
カツオはやりたかったのだろうかノリツッコミをした。すると後ろからバイクの音が聞こえた。
「???」やあ〜カツオくん！
どこか見慣れた声だった。その声は三河屋のサブちゃんだった。
カツオ「サブちゃん！」
サブ「どうしたんだいカツオくん三輪車なんかに乗って。漫才のおけいこかい？」
カツオ「そんなことはどうでもいいんだ。サブちゃんおれをバイクに乗せてくれ！」
サブ「ああ、おやすいごようさ！たった今仕事が終わったところだから、後ろに乗りなよ」
カツオはサブちゃんの後ろに乗り、バイクが動きだした。
サブ「・・・でカツオ君、一体どこへ行くつもりだい？」
カツオ「黒山ビルだ」
サブ「くっ・・・黒山ビルだって!?!」

サブちゃんは黒ビルのことをなにか知っていそうだった。

カツオ「もしかして知ってるの？」

サブ「あのビルにはヤクザや詐欺師などのチンピラどもが集まってるアジトだよ！」

カツオ「なっんだって！？そしたら姉さんはそのことを知らずに・
・
・」

サブ「もしかしたら、サザエさんを殺すつもりかもな」

サブちゃんはバイクのスピードを普通より速く行った。しかしバイクのスピードの制限は店長が決めている。

サブちゃん「スンマセンツ店長！サザエさんがピンチなので今回だけは許してくださいーい！！！」と大声で叫んでトツプスピードで黒山ビルへ直行した。その頃サザエは駅にたどり着き、黒山ビルへ向かう。

サザエ「へえ〜ここが黒山ビルか。どんな建物か知らないけど行くしかないわね」

サザエは黒山ビルの近くまで着いた。すると、近くまで行くと・・・ウィーンと扉が開きそこに入ると中にはタエコおばさんがいた。

サザエ「タエコおばさん！ほらっ！お金よ。これだけあれば借金返済も夢じゃないわー！」

タエコ「そうね　でもまず最初にあなたの命をもらってからそうするわ・・・」

すると突然、タエコの周りにはヤクザ達がわんさかいた。

サザエ「え！？どういうことなのタエコおばさん！」

「??？」決まってるんでしょ・・・金をもらったよ！」

とタエコおばさんは自分の服を引き裂いてポイツと捨てたその顔は知り合いでもない素顔だった。

「??？」さあ、おとなしく金を渡せ・・・」

サザエ「だっ誰なの!？」

「??？」おれの名は・・・黒裏満都くろしゅうまんだ!!--!!」

サザエ「黒裏・・・!？」彼の名前を聞いて思い出した。数々の金

持ちをラチツて命を奪った伝説の詐欺師「黒裏満都」みんなはその名前を略して「クロマン」と言われている。

サザエ「クロマンツ！あなた確か捕まっただはずじゃ・・・」

黒裏「ああ、あれか。あんときはな手下に助けてもらっただよオワカリ？」

サザエ「くっ！」

黒裏「周りには手下どもが50人以上いるんだぜ。しかもこのチンピラどもは全国各地から集めた不良軍団だ！！こいつらはヤクザ達の中ではエリートばかりだ！！」

サザエ「まさか・・・あの話は嘘？」

黒裏「ああ」

サザエ「あの電話は・・・」

黒裏「おまえが買ったあの電話は俺たち組織だけにつながるようになってるんだよ」

サザエ「あんた・・・！」

黒裏「おまえにあの電話を買わせた男はエリートの一人だ。特にアイツは人を誉めさすのがすごくうまくて女をカモにして金をだましとる詐欺のプロフェッショナルだ」

サザエ「あの卑怯者はどこ！？」

黒裏「あいつなら仕事だ。また女をカモにしてだましてるんだろうな・・・ヒツヒツ」

サザエ「最低！」

黒裏「さあ、俺たちのことを知ったからには生かしちゃおかねえからな死んでもらう」

黒裏は銃を取り出しサザエに向けた。サザエと黒裏の距離は直径10メートル。その周りには50人以上のヤクザ達がいる。しかし黒裏は遠距離からでも相手を抹殺でき彼は50kmからでも拳銃でターゲットを狙える。スナイパーの腕もかなりのものだ。サザエは周りを囲まれたので逃げることもできない。まさに袋のねずみとはこのことだ。

そのころ本物のタエコおばさんはお買い物をしていた。すると、男性「おっその美人お姉さんちよつときてよ！」

タエコおばさんを誘う一人の男性がいた。そう、黒裏が言っていた詐欺のプロフェッショナルの人だった。名前は「黒鯨詐欺男」略して「クロサギ」どこかの漫画やテレビなどで聞いたことあると思うが細かいことは気にしない。

タエコ「わたしのことですか？」

黒鯨「はいっ！あなたみたいな美人ママさんはあなた以外どこにいるというのですか！」

タエコ「は．．はあ．．」

黒鯨「そこであなたにオススメの商品を紹介しましょう！今回の商品はIHクッキングヒーターです！この機械はガスを使わずなんと電気だけで動くのです！！」

タエコ「まあ、それはすごいわ！．．でもお高いのでしょうか？」

黒鯨「とんでもありません！今回はあなた様だけ特別に本商品50万円のところたったの10万円です！！ワッオ、お安い！」

タエコ「すごいなんて安いのでしょうか！」

黒鯨「お安いでしょう ではご購入しますか？」

タエコ「ええ、買います」

黒鯨「ありがとうございますーーーーーす！！！！（ヒッヒッヒッ楽勝 こんな奴ちよろいぜっ！）」

タエコは財布からお金を出して黒鯨に渡そうとした．．その時！

カツオ「タエコおばさー！ん！買ったちゃだめだ！！」

タエコ「えっ!？」

黒鯨「まっ毎度ありがとうございます！とっとかくこれが商品です。またお会いしましょうでわっ！」

そう言つて黒鯨はせっせと荷物を片付け逃げようとしたがカツオとサブちゃんはバイクに乗っていたのですぐ追いついた。

カツオ「逃がすかー!!」

黒鯨「くっくそ！」

バイクは黒鯨に向かって突っ込んでしまえば黒鯨を跳ねた。バタツ！
黒鯨は5メートルほどぶっ飛んだ。

タエコ「どっとうしたのかツオちゃん？」

カツオ「タエコおばさん、コイツは詐欺なんだタエコおばさんのお金をだまし取るうとしたんだよ！」

サブちゃん「コイツは黒山ビルつというヤクザの組織の一員だ。危うくだまされるところだったな」

カツオ「タエコおばさん、姉さんがピンチなんだ！」

タエコ「えっ！！？サザエさんが！」

カツオ「タエコおばさんに化けて姉さんをだましたんだきつと殺すつもりなんだ！おれとサブちゃんはアジトへ向かうからタエコおばさんは警察に連絡してくれ！！」

そう言った後もうスピードで走った。

サザエは大ピンチだった。黒裏は銃を持っていてサザエは動くことができない。そんなピンチのなかサザエは言った。

サザエ「クロマン・・・」

黒裏「チッ！クロマンっなんてなめたこと言いやがって、部下以外にその名前を言われたのは初めてだぜ」

サザエ「あんた・・・本当に許さないわっ！」

黒裏「とにかくテメエが生きてるとおれらのことを言いそうだから死んでもらう・・・死ぬ！！」

ドキーン！！

銃声が鳴った。黒裏は見事にサザエを命中させたが・・・

サザエ「なにそれ？蚊でも刺さったわけ」

黒裏「ばっばかな！当たってるんだぞ！？」するとさらに、銃を撃ち続けサザエに当たってたがサザエが全然効いていない。どうしてだ！？

サザエ「こういうことよ！！」そう言うとサザエは服を脱ぎ始めた。その体には防弾チョッキをまとうていた。そう、そのスーツは以前カツオが身に付けていた超防弾チョッキ「KATUO・SU・TUO10」だった。カツオが寝ている間にスーツを装備していたのだ。

殺されることを計算して。

黒裏「ひきょうな!!」

サザエ「どっちがひきょうだろうとおまえが一番ひきょうだよ!!」
突然サザエは黒裏に向かって突進し始めた。

黒裏「おいっ! おまえら早くアイツを殺れ!!」と黒裏が指示した後50人近くのヤクザ達はサザエに向かって殴りかかった。サザエは相手の攻撃を軽々と交わしカウンターを仕掛けてヤクザを倒した。サザエはリアットやボディ・ブローなど技をかけた。

ヤクザA「つつ強い!」

ヤクザB「かなわね〜!!」

突然バイクの音がだんだん大きくなりカツオ達が乗ったバイクはやがてビルを割って中へ入った。まるで映画のアトラクションみたいなシーンだった。そしてバイクは問答無用にヤクザ達に向かって体当たりした。けが人はたくさん出た。やがて黒裏もバイクの強烈な体当たりの餌食になった。

黒裏「ぐわーーーーー!!! ママーーーーー!!!」

そう叫びながら黒裏は黒鮫よりすぐぶっ飛び壁を貫いた。すると黒山ビルの大黒柱ともいえる部分もそのぶっ飛びでビルの壁といっしょにぶっ壊れた。大黒柱が壊れると突然ビルが揺れだしビルは崩れた。核爆弾でも使ったかのような威力だった。ビルが崩れたことにより50人以上のヤクザ達はあっという間に全滅した。数分後、警察がやって来て組織は壊滅した。一方その頃あの売った黒電話はなんとか無事に返ってきた。あの買った「ピカ電」は処分されたのだった。

そして夕食・・・

マスオ「へえあの組織を壊滅させたのかい? たしかそのボスは一回逮捕された奴だよな」

サザエ「そうなのよいろいろ大変だったわ」

波ヘイ「全く無茶しおって!・・・グスッもしおまえ達2人が死

んだらわしはもう生きてられないんじゃないぞ〜〜 (泣)

フネ「はいはい・・・ (笑)」

ワカメ「それであの電話はどうなったの？」

サザエ「ああ、あの電話ね」

タラちゃん「戻ってこないですか？」

そう聞いつつタラちゃんはノートを出す準備をしていた。

サザエ「大丈夫よちゃんとあるわよ」

ワカメ「ほんとだわ」

サザエ「しかも組織を壊滅させたお礼に電話の修理してもらったわ」

フネ「よかつたわねタラちゃん」

タラちゃん「うん。電話さんただいまです」

黒電話も無事返ってきたのでタラちゃんはうれしそうだった。タラちゃんのうれしい顔を見たのは久しぶりだった。

第5話〜完〜

おまけ

サザエ「あのータラちゃん？」

タラちゃん「なんですか？」

サザエ「タラちゃんが大切に貯金していたお金全部使っちゃった」

タラちゃん「?!?!」

サザエ「おつりが足りなかったのよ。テヘッ」

タラちゃん「だまるDEASE!!!死ぬDEASE!!!!!!」

バタツ!!!

サザエ死亡 2度目・・・どんだけ金好きなんだサザエはー

!!!!!!

続く

第5話「裏切り」(後書き)

まだまだ続きます。次々敵が現れます。

第6話「旅行」(前書き)

今回は磯野家がゴールデンウィークで旅行に行きます。

第6話「旅行」

磯野家の世界では、5月を迎えます。ある日、磯野家ファミリーは5月のゴールデンウィークの予定を話し合っていた。

カツオ「はあくやっどゴールデンウィークに入ったよ」

ワカメ「ホントね」

タラちゃん「どこにいくですか？」

サザエ「そうね、やっぱり旅行がいいわ」

フネ「旅行といえはやっぱり東京の横浜ですよねお父さん？」

波ヘイ「うゝむ横浜にある帆船「日本丸」が見たいのう」

カツオ「えゝそんなのつまないよゝ」

マスオ「タラちゃんはどこ行きたいんだい？」

タラちゃん「動物園見に行きたいです」

マスオ「動物園？動物園といったら・・・」

サザエ「アフリカだわ！」

波ヘイ「バカモン！アフリカは動物園じゃないわいつ！！」

サザエ「うっせーなそれくらい分かってるわよギャグよギャグ！」

波ヘイ「なっ！この年寄りに向かってなんだその態度は！？」

また2人のけんかが始まった。

カツオ「いいかげんにしろよっ！今はけんかするんじゃないって旅行のはなししてんだろ！！！」

カツオがめずらしくいいことを言った。

波ヘイ「そうじゃなカツオのいうとおりだ。こんな子どもに注意されるワシの方が子どもじゃな・・・」

するとカツオはちいさく笑った。

カツオ「クフフツ。バツカじゃねえの？」

波ヘイ「何を言っとるんじゃバカモンが！！！！！」

カツオ「えゝ！？なんで聞こえてるの？」と波ヘイに殴られながら

言った。

そう、波ヘイの耳は他の人とは違ってどんなに小さな声でも聞き取る「地獄耳」を持っているのだ。この地獄耳を持った波ヘイは近所でも有名である。

フネ「相変わらずお父さんの耳はすごいわね」そう言われて波ヘイは照れた。その時カツオは心の中で「おまえは子どもか！」とツッコミをする。

タラちゃん「ぼくはそのアフリカっていうところに行きたいです」
サザエ「そうね。みんなはそれでいいわね？」

サザエ・タラちゃん以外「賛成！！」
みんなはそれに反対せずあっさり終わらせた。なぜなら、タラちゃんの見解を反対すると真つ先にその人をノートの力で殺されてしまうから。過去に餌食を受けたのは数十人だった。中には磯野家ファミリーが何人か入っていた。

旅行場所がアフリカと決めたサザエは早速旅行会社に問い合わせ、予約を取ってもらった。その間カツオとワカメとタラちゃんは部屋に入った。

カツオ「アフリカか」。ワカメとタラちゃんは動物で一番強いのは誰だと思っ？」

ワカメ「あたしはチーターだわ。だって、他の動物と比べて速いもん」

カツオ「はあっ？だれもおまえがチーターが強いって理由聞いてないし」

ワカメ「ああんっ！？んだとコラッ！！」またか……。そう思ったタラちゃんはすぐさま部屋から出た。

そこでさらにカツオはワカメを追い込む。

カツオ「まっ最もワカメの方が一番強いと俺は思っけどな」

ワカメ「あつあたしはレディよ。そんなこといいと思ってるの？」

カツオ「レディ？おまえが？どこが？おまえがレディなんてあり得ないし」

ワカメ「・・・」

カツオ「だいたいおまえパンツ丸見えだよな。おまえが階段上がる時、いつつ男子が下から覗いているぜ例えば「お」。今日は白か」
「って言いながらいやらしい顔で覗いたりとか」

ワカメ「・・・」

するとワカメはだんだん顔が赤くなった。

カツオ「そんなとき近くにおれもいたんだけどな。中島なんかカメラを持ってきてパンチラ撮ってたぜ」

ワカメ「なんだとコラー！！！！」

カツオ「おーこえ、でもまだまだだなほらもつと怒れよ」

そう言つて、ワカメをさらに怒らすためカツオはスカートめくりを始めた。

カツオ「おおおおおおつと！今日はピンクか」

それをやられたワカメは激怒した。

ワカメ「いいかげんにしやがれクソが！！」

カツオ「おーこえ、・・・。やっぱりワカメの方が怖いわ」

カツオはしつこくワカメに暴言を言う。するとワカメはもうむきになつて机の中からワカメ・ハンマーを取り出しカツオに襲い掛かった。

カツオ「おい・・・ワカメ？なんだそのハンマーは！？なんでそんな物騒なものを机の中に入れてんだよ」

カツオはワカメの机の中にハンマーが入っていることをまだ知らなかったのだ。

ワカメ「このハンマーはね、貴様を殺すためにある物なのよ！前にもこれであんたを叩きまくったんだよ！！・・・全く効かなかったけど・・・」

2人の部屋から大きい音が聞こえたのでタラちゃんはその音に気づき、その部屋の居間を開くとそこはもはや戦争だった。ワカメは手に持っているハンマーを使いそれをカツオに向かって叩いて、対してカツオは自分の勉強机の棚の裏から釘バットを取り出しそれを持

って応戦した。

タラちゃん「2人ともやめるです。今はけんかしてる場合じゃないって言ったのはカツオ兄ちゃんじゃないですか」

カツオ「うるせークソチビ！それとこれは別なんだよ。テメエはそこでだまってみそ汁でも作っとけ！」

タラちゃん「あぁっ!?」突然タラちゃんの表情が変わった。

カツオ「聞こえなかったのか？みそ汁でも作っとけって言ったんだよバーーーーーカ!!!」

タラちゃん「ぼくはけんかを見るんじゃないで旅行に行きたいんD E A S E!!!!」

タラちゃんはノートを取り出して2人に裁いた。

タラちゃん「2度とぼくの前でけんかをしたりそのような暴言を吐いたりしたらもう命がないと思うD E A S E!!!」

タラちゃんはノートに2人の名前を書いた。それらの名前を書くのは1分もかからなかった。

タラちゃん「D E A S E!!!!いつものより2倍の裁きD E A S E!!!」

2人はしばらく闇の中に吸い込まれたかのように倒れた。

2人が目を覚ましてから2時間後・・・

カツオ「全くなんでこんな目にあわなきゃなんねえんだよ!?おれはただワカメに一番強い動物は何?って聞いただけなのによー!!!」

ワカメ「なに言ってるのよ。途中からエッチな話したくせに!!」

カツオ「んだとコノヤロー!!」

タラちゃん「・・・」2人はその時タラちゃんの殺気を感じ取り、その場でけんかをやめた。

マスオ「ところで予約はどうなったんだいサザエ」

サザエ「ええ。予約はできるそうよ」それを聞いたみんなはとても大喜びだった。・・・がしかし、

サザエ「でも・・・予約はできるけど特別条件があるそうなのよ」その特別条件というのはなんなのかマスオはサザエに聞いた。

マスオ「特別条件つてなんなんだい？」
サゼエ「予約はできるんだけどそのかわり、観客を20人集めてくれっていう条件なのよ」
マスオ「観客を20人集めるだつて!？」
波ヘイ「なぜそんな条件を出したのかのー？」
カツオ「俺たちで7人だけ後13人足りないな」
ワカメ「どうしよう・・・」
タラちゃん「人を集めるです」
フネ「そうね。人数が揃わないからと言ってここであきらめるのはまだ早いわ」
サゼエ「そうだわ。カツオ、アンタの友達連れてきなさいよ」突然サゼエはカツオに言った。
カツオ「えっ!？」
サゼエ「どうせみんな暇だろうだから連れてきなさいよ。ついでにかおりちゃんも」
カツオ「オオオオオ!?!分かりました姉さん!」まるでどこかの兵隊が敬礼をしているかのようにした。
タラちゃん「イクラちゃんも一緒に行くです。」
サゼエ「そうねタエコおばさんやノリスケさんも誘おうかしら」
ワカメ「こうするとドンドン人数が増えるわねお母さん」
フネ「そうね」
こうしてフネの一言によって諦めていた空気があつという間に明るい空気へと変わったのだった。
そして、ゴールデンウィーク初日
その時はみんな x 空港に集合だった。
カツオ「みんな遅いな」
サゼエ「しまったわ! 集合場所は言ったけど、集合時間は言ってなかったわ!」
波ヘイ「とんでもないボケじゃの〜」
すると・・・

「????「おーい！」するとどこからか聞き覚えのある声でした。その声はカツオ達が呼びかけた連中であつた。かおりちゃん・中島先生・タエコおばさん・イクラちゃん・ノリスケおじさん・(ついでに)花沢さんがやって来た。

カツオ「おーよく来てくれたね君たち」

ワカメ「お兄ちゃんが威張ることじゃないでしょ」カツオはちよつとふざけた感じで照れた。

サザエ「でも、まだ足りないじゃないのもうすぐで飛行機出るわよ」マスオ「えっえっ！そんなのかい!？」

カツオ「心配ないってこんな大事な時間に遅れる奴等じゃないからさ・・・」

サザエ「ちっ・・・ちよつとそれってどういうことなの?」つとサザエがカツオに問おうとした後とてもにぎやかな声が空港中に響き渡っていた。その声はだんだん近づいてきたのだ。その声の正体は・

カツオの学校にいる先生達だった。同道先生・珊瑚先生・藤丸先生・鮫田先生・鯨男先生・ドルフィン先生の6人。

サザエ「えー!?!カツオが言っていたスペシャルゲストって先生達だったの!?!」

カツオ「そうだよ。これで全員20人いるね」どうにかこうにか観客20人を集めることができタダで乗ることに成功した。とりあえずこのお話はここで終わりにします。続きをお楽しみにー!!

第6話〜完〜

おまけ

フネ「みなさんお忙しいところよく来てくれましたね」

先生達「いやいや」

カツオ「それにしても無理しなくてもいいって言ったのにも関わらずよく来たねー。もしかして暇だったの?」

先生達「・・・」

先生「誰も先生達に質問しに来てくれないんだ・・・ひっく(泣)」

第6話「旅行」(後書き)

サザエさんサザエさんサザエさんは愉快だな

第7話「観光」(前書き)

新型コロナウイルスが最近はやってますねー。

みなさん手洗い、うがいを忘れないでくださいねー

第7話「観光」

第7話「観光」

飛行機に乗ってから丸一日たちとうとうアフリカに着いた。飛行機から出たみんなはもう眠そうな状態だった。

サゼエ「あゝあゝもうだめ・・・」

カツオ「お・おれも・・・」

珊瑚「まさかこんなにかかるなんて思いもしませんでしたわ」

ドルフィン「ワタシハモウSleepジョウタイデース・・・フゝアゝ・・・」

タラちゃん「なにを言ってるですか。みんな行くDEATH」タラちゃんだけは元気だった。

フネ「フフフ。タラちゃん元気でいいわねアナタ」

波ヘイ「ZZZZZZ」波ヘイは立ったまま寝ていた。その光景はまさに神業であった。空港から出たら、外人の人に声をかけられその人はアフリカを案内するガイドであった。早速ガイドさんにアフリカを案内してもらったためにガイドバスに乗った。ガイドが運転している隣の席にはドルフィン先生が乗り仲良く話していた。しかしガイドとドルフィン先生が何を話しているのかサゼエ達には分からなかった。ドルフィン先生に勉強を教えてもらっているワカメにも理解できていなかった。

しばらく乗ると周りは草原だった。そこにはゾウ・シマウマ・キリンなどお馴染みの動物がそこにはたくさんいた。それを見たタラちゃんも動物を見て興奮していた。

タラちゃん「はあ、はあ、はあ」

マスオ「タラちゃん」マスオ兄さんが呼びかけてもタラちゃんは聞こえていなかった。

ガイド「サア、ミナサンツキマシタデス。アフリカイチノカンコウメイブツ「サファリ・タワー」デス!!!イヤツフォー!!!」ガイド

ドさんはかなりのテンションで言ったのだった。さすが外人……
先生「さあ行こうかみなさん」

全員「おー！ー！！」みんなはサファリ・タワーに入り始めた。

女性「Excuse me」

中島「えっ？僕になにか用ですか？」

カツオ「バカ違うよ！あれはいらっしゃいませって言ってるんだよ」

中島「へえ、そうなのか」

かおり「磯野くんって英語に詳しいのね」

カツオ「いや、それほどでも……あるかな？」

花沢「（ケツ！）なによ磯野君つたらしゃしゃり出しやがって」

その女性はサファリ・タワーの中を案内し始めた。その女性に聞いた説明によるとこのタワーは20階以上あるそうだ。前回、黒裏と戦った黒山ビルは15階立てである。今では廃墟となっているけどね……。

マスオ「うわーすごいな」

同道「建物の中にこんな光景が見れるのは生まれて初めてだ」

藤丸「さすがアフリカの観光名物のことだけはありますな」

ドルフィン「イエー！ー！ー！ー！アフリカサイコウデース！！
フオ~~~~~」

鮫田「もうこの人はもうどうにも止まりませんね」

鯨男「……」先生達が会話をしている間にエレベーターの前まで歩いていた。

女性「まもなくエレベーターにお乗ります」エレベーターの扉は閉じ、どんどん上に上がっている。

イクラちゃん「ハイハイ」

タエコ「イクラも楽しい？」

イクラ「ハイ」

サザエ「よかったわね」エレベーターは20階までいき他の階をスルーをした。そして、たどり着いた……最上階20階に……。エレベーターの扉が開きみんながそのエレベーターから出た。

女性「みなさま。これよりこのサファリ・タワーを建てた張本人」
Mr. アニマン「様からお話があります」

カツオ「Mr. アニマン？誰だそれ？」

マスオ「聞いたことないな・・・あの誰ですか？」

女性「では、Mr. アニマン様からです。どうぞ」

Mr. アニマン「Hello! Everyone!! Welcome to the サファリ・タワー!!」

全員「・・・」みんなはだまった。

女性「えっええみなさま、この御方がサファリ・タワーを建設した

Mr. アニマン様なのです!!」

マスオ「・・・誰なんだい？」

珊瑚「聞いたことありませんわねー」

同道「ですなあ」

ドルフィン「パンフレット二ハマツタクノツテイマセーン！」

Mr. アニマン「チツチツチ。ソノパンフレットハoidダカラワタクシノnameガノツテイナイノハトウゼンデース」なるほどとドルフィンは納得した後、手に持っていたパンフレットをそこら辺に捨てた。

ドルフィン「デハnewパンフレットヲGive me it!」

女性「かしこまりました」と女性はカウンターからパンフレットを取り出してドルフィンに渡した。

タラちゃん「ここではどんなことをしているのですか？」タラちゃん興味津々であった。

Mr. アニマン「フフフ、アナタミタイナsmall child
ノクチカラソンナquestionガテクルナンテアンビリーバ
ボー!・・・ホントウハコノコトハキギョウヒミツナンデスケド・・・
・・・イイデシヨウ。キミタチダケニトクベツニオシエマシヨー
!!!」

タラちゃん「ワイワイワイ」タラちゃんはうれしそうだった。

先生「・・・」

中島「どうしたんですか？先生」先生はMr・アニマンが言った企業秘密という言葉がつかかる。

先生「一体・・・どうということなんだ？」

Mr・アニマン「デハガイドサン・・・レイノモノヲ・・・」

女性「かしこまりました。例の・・・アレ・・・ですね」

Mr・アニマン「Yes！！アレデース」

二人はヒソヒソ話をしてクスクス笑い出した。

かおり「どうして笑っているのですか？」かおりちゃんは二人が笑っていたことを聞くと、

女性「いついえいえなんでもありませんお客様。こちらの話ですの
であまり気にはなさらないでください」

かおり「はあ・・・」

花沢「一体なんの話をしてるかぐらい教えてくれたっていいじゃないのねえええ磯野君？」

カツオ「あ？なに？」

花沢「んも〜なに？っじゃないわよレディのはなしは最後まで聞きなさいよ！」

カツオ「はっ？レディ？おまえが！？ありえねー」

カツオはいつでもどこでもふざける実にアホな少年だ。

花沢「You Die！！」突然花沢はカツオに襲いかかる。花沢は服のポケットから花沢専用スペシャル武器を取り出しカツオに向かって撃った。

バーン！！

銃声がサファリ・タワーじゅうに響いた。カツオは花沢が撃った弾に当たり、倒れた。その光景を見たかおりちゃんは思わず叫びみんなは後ろを向いた。

花沢「やったか？」と花沢はカツオに近づこうとしたその瞬間、カツオは突然立ち上がり花沢を押し倒した。

花沢「イタツ！んにすんだこのおにぎり頭がー！！」花沢は武器でカツオに向かって撃ちつづけた。でも命中しているのに全く効い

ていない。

花沢「きつ効かない・・・だと!？」

カツオ「八八八残念だったな花沢さん」カツオはいきなり自分の服を引き裂いてポイツと捨てた。するとかおりちゃんはまた「キャーッ!」とまた叫びだした。カツオの体には防弾スーツ「KATUO・SU・T U O 1 0」が(いつもどおり)装備していた。

カツオ「花沢さん達にはまだ見せてなかったね・・・そしてかおりちゃん見たまえこの僕の強靱な肉体をーーーーー!!!」

そしてかおりちゃんの感想は、

かおり「磯野さんってエッチだったんだ・・・。」と言って中島の後ろに隠れた。

カツオ「うわ~~~~~!!!」カツオは狂い始めた。先生に向かっていたあたりをしたり、突然パンツいっちょになって中島に襲いかかったりした。

中島「うわー!どつどうしたんだよ磯野!？」

波ヘイ「全くだらしないのう」

ドルフィン「コレガシツレンツテイウモノナンデスネ。オベンキョ

ーニナリマシター!!」

カツオ「ギャーッうわー!!」

Mr・アニマン「ト・トニカク、ソナアホハホットイテホンジツノメイニイベントノセツメイシマショー!!」Mr・アニマンの説明を聞いて20分後、

Mr・アニマン「ソレデハ、everyoneサキホドイツタセツメイハリカイデキマシタネ?」

みんな「わかった!!」

女性「ソレデハレディーーーーーゴーーーーー!!!」

するとみんなはMr・アニマンのスタートの合図とともにバラバラになった。

カツオ「え・え?なに?なにが始まったんだ?」カツオは正気に戻った。

中島「さっきの話聞いてなかったのか？このサファリ・タワーじゅうを探検してこの建物内にある5つのスタンプをはって競い合うんだよ」

カツオ「なるほど、スタンプラリーか」

中島「まあ、かんたんに言えばそうなるね」

Mr.アニマン「But!ココハ20カイデース。イツカイカライカナイトスタンプハミツカリマセーン！」

カツオ「とっ……ということは……」

Mr.アニマン「Yes。フリダシニモドリマース!!」Mr.アニマンはボタンを押して突然床に大きな穴が開き、全員を落とした。みんな「うわ~~~~~!!」

Mr.アニマン「ミナサーンガンバツテクダサーイ」

そして、ここサファリ・タワーで悪夢のスタンプラリーが始まるのだった。

第7話 完

第7話「観光」(後書き)

まだまだ続くんだよ・・・だよ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9250h/>

サザエさん

2010年10月9日07時02分発行